

漢代から魏晉南北朝期における 月氏集團の動向について

大 西 啓 司

目 次

はじめに

第一章 月氏とTocharoi

第一節 月氏の西方移動と大夏征服

第二節 Tocharoiとは

第三節 Tocharoiとティリア・テペ遺跡

第四節 月氏=Tocharoi説から再考する月氏の西方移動の性質

第二章 都(覓)貨羅とTocharoi

第一節 Tocharoiの勢力圏

第二節 『大唐西域記』にみられる「都貨羅国」と「都貨羅故地」の領域

第三節 Tocharoiとトカラ語

第三章 小月氏について

第一節 小月氏とは

第二節 小月氏の種族問題

第三節 湟中月氏胡

おわりに

はじめに

中国史的区分でいう漢代から魏晉南北朝期にかけての非漢族集團について注目する研究者は多い。特に匈奴については内田吟風・沢田勲らによつてその文化・社会組織などその具体像が明らかにされてきた。しかし、匈奴と同じ時代に存在した月氏についてはどうであらうか。小谷仲男は月氏には二つの顔が知られているとし、「一つは秦漢時代、中国の西北辺境（甘肅省西部）に出現し、モンゴル高原の匈奴と勢力を争った中央アジア遊牧民族としての顔である。もう一つの顔は、月氏が最終的に匈奴に駆逐され、アム・ダリア流域に退却した後、その勢力の中から勃興したクシャーン王朝大月氏である」と述べるが、匈奴と比較すると知られるところは曖昧である。

これまで月氏研究の関心の中心は、主に月氏の西方移動の時期と月氏とクシャーン王朝の關係にあり、月氏が具体的にいかなる集團であつたのか、月氏の存在がその關係する地域にどのような影響を与えたかについては比較的注意が払われていない。故に内陸アジア史と、漢代から魏晉南北朝期の非漢族集團史に於いて月氏をどう位置づけるかについては十分に検討されてきたとはいひ難い。しかし、月氏の具体像を明らかにすることは古代内陸アジア史を考える上で重要な命題であると筆者は考えた。そこで筆者は第一章に於いて、月氏に関する東西史料の対応問題の中で提唱される月氏=Tochar-

②説を手がかりにその妥当性を検討し、「月氏」の中に「Tocharoi」が含まれていたことについて論証したい。

第二章においては、第一章の検討結果に基づき『大唐西域記』の「都貨羅国」「都貨羅故国」に注目し、月氏と「都貨羅国」「都貨羅故国」の關係「Tocharoi=Sk̐t. Tūkhāra=「都(觀)貨羅」という名称上の対応を基に「Tocharoi」の勢力圏を検討する。そして『大唐西域記』の記述に現れる「都貨羅国」「都貨羅故地」の領域の地域的特性を『大唐西域記』と十世紀にGuzganにおいて書かれたペルシア語の地理書 *Hudūd al-'Ālam* の記述を対比することによって明らかにし、それを基に「Tocharoi」の移動の歴史的な位置付けを検討したい。

第三章では月氏の残存勢力といわれる小月氏に着目し、小月氏はどのような地域に分布し、具体的にどのような集団であったのかについて検討する。そして湟中(現在の青海省、青海湖東岸地域)に拠った小月氏である湟中月氏胡に着目し、なぜ小月氏が湟中にコロニーを形成していたのかについて、湟中という地域の地理的環境・地域的特性を検討することによって明らかにしたい。

以上の検討を通じて、漢代から魏晋南北朝期に於ける月氏集団(西方移動したものとそうでないものを包括する呼称として用いる)の具体像を明らかにしたい。

本 論

第一章では、先行研究においては漢籍史料に見られる月氏の大夏征服と、西洋史料に見られるスキュタイ四部族(Asii, Pasiani, Tocharoi, Sacaraoi)のバクトリア侵入は対応すると考えられており、其の中で「Tocharoi=月氏とする説がある。筆者はこの説を月氏を構成していた集団について明らかにする手がかりとなしうという考えを示した。そして、ポンペイウス・トログスやプトレマイオスの記述と司馬遷『史記』の記述を比較検討すると、「Tocharoiとは月氏の中の一集団を構成する集団であると考えられることを述べた。

第二章では「Tocharoi=Sk̐t. Tūkhāra=「都(觀)貨羅」とされることから『大唐西域記』と『大唐大慈恩寺三藏法師伝』の記述にみられる「都貨羅国」と「觀貨羅故国」に注目し、そこから「Tocharoi」の勢力圏を検討した。その結果として「都貨羅国」と「觀貨羅故国」は月氏との関係が深く、また「都(觀)貨羅」という名称も「Tocharoi」と対応していることから、「Tocharoi」の勢力圏は現在のエンデレから北部アフガニスタンにあったと考える見方を示した。そして、北部アフガニスタン(大夏)、即ち「都貨羅」の地域的特性と、この地域に「Tocharoi」が移動してきたことにより古代アフガニスタン史にどのような影響を与えた可能性があるのかを『大唐西域記』と *Hudūd al-'Ālam* の記述を対比することにより検討した。

その結果として、まず『大唐西域記』に見られる「都貨羅国」と「都貨羅国故地」は遊牧国家が勢力を発展させるのに適した条件を備えていることを述べた。そして、「Tocharoi」の支配を経てクシャーン朝・エフタルの時代になると、「都貨羅」と呼ばれる地域はそれらの政権の基盤となり、この地を基盤としてその勢力を北西インド方面へと広げていったことを述べた。「Tocharoi」が移動してくる以前のバクトリアには、アレクサンドロス大王の東征に伴い到来したギリシア人達の末裔による支配が続いていた。しかし「Tocharoi」の移動により、バクトリアには遊牧民による定住民の支配という構造が作られた。この構造は、クシャーンとエフタルの時代でも同様であった。故に「Tocharoi」の西方移動は、バクトリア（北部アフガニスタン）に遊牧民による定住民支配という構造を築く先駆けであったと考えた。

第三章においては、月氏の残存勢力といわれる小月氏に注目した。小月氏は西平・張掖の間の地域からツアイダム盆地、そしてタリム盆地東南端、現在のミールラの辺りに分布していた。この小月氏の分布範囲をたどると、小月氏がいわゆる「青海路」沿いに広がっていたことが分かる。この点から小月氏というのは「青海路」を利用して集団であることが推察される。そして、小月氏が西方移動していないのは、彼らが元来張掖や酒泉を中心にして、おそらくは湟中もその勢力圏に納めていたが、匈奴の圧迫により、その勢力圏をツアイダム・湟中方面に移したからではないだろうか。

漢代から魏晉南北朝期における月氏集団の動向について

湟中に拠る小月氏は湟中月氏胡と呼ばれる。湟中月氏胡は、月氏が河西地方からイリ地方へ移った（前一七六年）際に湟中に移っていた。そして後漢・中平元年（一八四）ごろまで、湟中に居住し、その間にその周辺地域で絶対多数を占める羌族に民族的に同化されることもなく、「月氏」としてのアイデンティティを保ち続けていた。そこでなぜ湟中に小月氏がコロニーを作っていたのか。この問題を、湟中の地域的特性を示す史料から検討してみた。

検討の結果、湟中について①土地が肥沃、且つ牧畜にも適す。遊牧・農耕共に可能②西海（青海湖）から魚・塩の利を得られる③要害の地であり、雑多な集団が集中する④「青海路」が通過する、という主として以上の四点が分かった。そして①②④からは小月氏が湟中にコロニーを作っていた理由を推察できる。そして、③の雑多な集団が存在するきっかけを作ったのは、小月氏であるとの考えを述べた。

そして湟中に拠る小月氏は、「義従胡」と呼ばれる後漢王朝の西辺防備体制の一環に組み入れられた。「義従」というのは後漢が異民族で構成したものであり、湟中の義従胡は湟中月氏胡のみで構成されていた。そういったなかで、湟中月氏胡は中平元年（一八四）反乱を起こす。その原因を直接示すものはないが、同時期の史料に「湟中義従」の生活の困窮を示すものがあることから、湟中月氏胡も同様に生活の困窮によって反乱を起こしたのではないかと推察した。

おわりに

以上の検討を通しての筆者の具体的な月氏集団像を以下に示したい。

月氏の中には「Tocharoi」と呼ばれる部族があり、シル川北方から東トルキスタン辺りまで勢力圏を持っていた。そして、河西回廊には小月氏という集団がいた。「Tocharoi」と小月氏はおそらく違う部族であるが、漢人からは「月氏」と総称された。これはヘロドトス『歴史』に記されるスキタイの「国家」の在り方と同様であったのではない。スキタイの「国家」は、本来の意味で言うスキタイ（王族スキタイ人）を頂点として、それに従って連合体を形成する遊牧集団（遊牧スキタイ人）、農耕に従事する人々（農耕スキタイ）、都市住民（ギリシア系スキタイ人）らを支配下に於いて成立したものであった。このスキタイの「国家」の在り方を月氏にも当てはめ考へることは出来ないだろうか。

そして、前漢始めごろ匈奴が勢力を増し、「月氏」を圧迫するに及び、「Tocharoi」と呼ばれる集団は西方へ勢力圏を縮小させ、小月氏と呼ばれる集団はその勢力を南西へと移した。そして、「Tocharoi」は大夏（北部アフガニスタン）へと侵入する。そして、遊牧国家にとって勢力を増加させるに適した地域的特性を持つ北部アフガニスタンに拠って進化発展し、その行き着く先としてクシャーン王朝があらわれた。そして「Tocharoi」は「Tukharistan」（トカラ人の土

地）」として其の名をイスラーム時代に残したのではないだろうか。以上のようにまとめることができる。